

世界から、東アジアから 歴史を見る

■ 世界、東アジアとのつながり

世界、東アジアの記述を充実させ、日本と世界の歴史が相互に深くかかわっていることや、文化や生活の多様性に気づくことができるようにしました。



明から優遇されアジアの
交易を担った琉球王国。
多彩な交易で栄え、独自
の文化が育ちました。

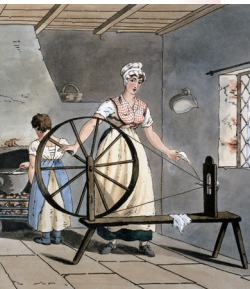
綿ほりの中で働くイギ
リスの子ども。綿織物と
蒸気船は、インドへ、ア
フリカへ、日本へと。

(13) アジアの海をつなぐ王国 — 琉球王国 —

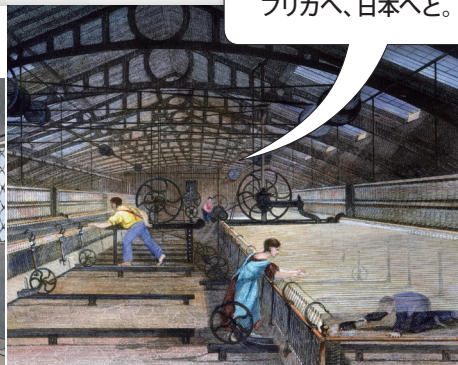
琉球の船はどこへどんな物を選んでいったか。ラッコの毛皮はどんなルートで手に入れたか。

■ マラッカに行く琉球船

1463年、琉球王国の那覇の港から、たくさんの商品を積んだ船が、マラッカ王国（現在のマレーシアの一部）をめざして出航しました。船は、明の皇帝からあたえられたものです。長さ40mほど、大砲や矢



①糸車で羊毛から糸を紡ぐ(1814年)



②ミュール紡績機(1830年代はじめ)／綿花から一度に300本ほどの糸を紡ぐ。

(3) 工場で働く子どもたち — 産業革命 —

少年が朝5時半から働く工場は、どのように変わっていくのか。労働者は何を求めるようになったか。

■ 蒸気と綿ほりの中で

7歳の男の子プリンコウは、朝の5時前にベルで起こされます。麦がゆの朝食をかきこみ、寄宿舎を出て、5時半には工場に入ります。綿花から糸を紡ぐ工場の中は、綿ほりがたちこめ、むし暑くて35℃になることもあります。腰をかかめて床をはいまわり、細くずを掃除します。昼に30分の食事時間をとって、夜の8時まで働きつづけます。寝て床にすわりこむと、監督のムチがとびました。

事故は目の前で起こりました。10歳のメアリのエプロンが、回転する機械の軸にはさまれ、体ごと巻き込まれたのです。片足を失った女の子に、工場主は見舞金さえ払いませんでした。1847年には、イギリスの綿工場の労働者の70%以上が、女性や18歳以下の子どもでした。

■ 手作業から機械へ

イギリスの人びとは、長い間、職人が手作業でつくった毛織物を着てきました。18世紀には、インドから綿織物が輸入され、人気を集めました。あざやかな色に染まり、軽く、洗濯しやすいからです。

イギリスでは、綿織物を速く、安く、大量に生産するために、新しい機械が次々に発明されました。アーケライトは水力紡績機を発明し、いくつもの紡績工場を経営しました。

蒸気機関を動力に使うようになると、工場は町につくられるようにな



③世界で最初に営業した鉄道(1825年)／スチムフンソンの設計した蒸気機関車がマンチェスター-リバプール間を時速27kmで走った。



④産業革命のころのイギリスのおもな都市

(5) 江戸を行く朝鮮通信使 — 朝鮮

通信使の行列は2000人。朝鮮はなぜ送られ、幕府はなぜ受け

■ 漢城から江戸へ

江戸幕府は、徳川吉宗が将軍になったとき、対馬藩(長崎県)を通じて朝鮮に求め、朝鮮は通信使を派遣しました。

正使や副使には教養ある高官が任命して、使節は全部で500人にもなり、が案内し、行く先々の藩からも人数が行列になりました。江戸に着くと、正使と中と見せて、国書を交換する儀式を各藩は、行列が通る道を清掃することによって迎えること、見物人に不作法がないようにすることなどの触れを出しました。通信使が通らない地域の人びとも、接待の負担を求められました。

めったに見られない行列だったので、多くの人びとが見物しました。また、地方の儒学者は宿を訪ね、漢文を用いた筆談で教を請いました。今でも、通信使を迎えたことが、祭りや人形として各地に残っています。

■ 申維翰と雨森芳洲

このときの通信使の書記官・申維翰は、対馬藩の役人・雨森芳洲と、半年以上、いっしょに旅をしました。二人は、朝鮮語を使って遠慮なく話せる間柄になったといわれます。次は、二人の会話です。

朝鮮通信使の大行列が江戸に向かいます。豊かな交流、外交、交易の姿を描きます。



⑤雨森芳洲(1668-1755)／対馬藩の儒学者、釜山に渡って朝鮮の地理・歴史・朝鮮語を学んだ。「敵愾の交わりが大切な」と説いた。(岩波文庫)